

---

# HAPPY ! ? LIFE

花音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HAPPY!? LIFE

### 【Nコード】

N3422Z

### 【作者名】

花音

### 【あらすじ】

新婚だけど別居中の大学生夫婦。  
入学して半年たったころ、嫁、花音かのんの妊娠が発覚した。  
旦那、優ゆうは花音の手伝いをしようと必死！  
大学生夫婦の子育て生活記。

私がママですか？！

私の名前は花音<sup>かのん</sup>。

今は20歳。

18歳のとき大学に進学して、高校時代から付き合っていた彼氏と結婚。

お互い、学を深めるためにも卒業するまでは別居と決めていた。だけど、進学から半年、大学に大分なれたころにあることが起きた。

私は友人とぶらぶら町に遊びに出かけていた。

私も彼もお互い、結婚していることは誰にも言わず、関係があるということもいっていなかった。

そんなときに友人とふざけて、妊娠検査薬を買った。

すぐさま使ってみると、友人は「陰性」当たり前だけどw」と笑っていた。

だけど、私の目にはしゃねにならないものが飛び込んできた。

”陽性”

こんな結果が出るというのは信じられなかった。

もちろん関係を持ったのは旦那だけだ。

しかし、結婚して関係を持った回数は2回だ。

2回で・・・私は正直、彼の繁殖力に驚愕した。

友人にはそのときは笑顔で、「私もw」といっていたが、飲みに行こうという誘いを断って、その日は帰った。

次の日、自分の取っている講座が午後からだったから産婦人科に行った。

「こんにちは・・・初診なんですけど・・・」

ときどきしながら手続きをして、少し待っていたら名前が呼ばれ

た。

苗字が変わってから半年しかたっていないくて、すぐに反応ができなかった。

しかし、ちゃんと診察室までたどり着けた。

さまざまな検査の後、診察室で先生と話しをした。

「18歳、大学生ってことだけど結婚は？」

年があまりはなれていなさそうな女性の先生だった。

「してます。でも、在学中は別居しようって話になってて・・・  
眉を吊り上げる先生。

「あら、じゃあ、旦那さんの子供じゃないの？」

「いやいやいや、そうはいってません！」

「旦那の子です。彼としか関係を持ったことはないの。」

「ふーん・・・今ねえ、二ヶ月なのよ、んでね、今寒いじゃない、10月だし。今無理すると危ないからできるだけ安静にしてたほうがいいのよ。あなたご両親と同居？」

「いや、一人暮らしです。ただ、結婚したときに親戚のおじさんが建築デザイナーで、将来二人で住む家って言って一戸建てを建ててくれたんです。そこに今は一人で。」

「一人か・・・旦那さんと家の距離は？」

「隣のアパートです。」

「あら、じゃあ、買い物とか頼んでしばらくは安静にしてたほうがいいわ。」

先生の話では、今少し危ないから学校にも行かないほうがいいとのことだった。

それはいいとして（あんまりよくないけど）、いつ彼に言おう・・・。

そんなこと考えながら、家路に着いた。

するとたまたま駅で帰宅途中の彼と会った。

「あれ？花音、今日は午後から講座じゃなかったっけ？」

彼はきよとんとした顔をしていた。

「優ゆうこそ、午後から実験室行くとか言ってたじゃん。」  
すると、子供のような笑顔でこういった。

「なんか、そわそわしちゃってさ。なんかあるって言うんじゃないんだけど落ち着かなくて。虫の知らせってやつかな？今までこんなことなつかたんだけど・・・それで今日は帰ることにしたんだ。」  
ふわふわしたこげ茶色の髪の毛に、優しそうな、かわいい笑顔。かれに言わずにはいれなかった。

「実は、優に言わなきゃいけないこと・・・があ・・・」  
のどになにかこみ上げてきたと思った瞬間、口から嘔吐物が・・・

気が着くと家の中。

「あれ？」

「ん？ああ、気がついた？大丈夫だった？」

「うん・・・ごめんね。」

彼は心配そうに私の頭をなでた。

「調子悪かったの？」

彼は机の上を片付けながら私に尋ねた。

そのとき、椅子においてあった私のかばんが床に落ちた。

「ごめん。ごめん。ん・・・？産婦人科？」

彼がその紙を持ってきよんとしている。

「どつか悪かったの？」

私は言うにいえなくなっていくた。

彼は紙を持ってている手で、紙を大きく広げた。

「・・・ええ!？」

彼が今まで発したことの無いような大きな声を発していた。

「ご・・・ごめんなさい。」

「え？なにが？」

「卒業するまで子供は絶対にほしくないって・・・優、最初に言  
ったでしょ？」

優は顔を輝かせて私の手を握った。

「ほしくないわけじゃない。そりゃあ、結婚したんだし、子供が早く見たいと思ってる。花音、安心して！」

そのまま、優は私の親や彼の親に電話をかけ始めた。その日は優が食事の支度をしてくれた。

眠るとき優の手を握りながら、話をした。

「優は子供ができたって実感ある？」

「んー・・・実感っていうか、すごい興奮してる。だって、僕の子供が花音のお腹の中にいて、8ヶ月もしたら会えるんだよ?! あゝ女の子かなゝ男の子かなゝ」

「んふふ。まだ2ヶ月だよ？」

「早くみたいよ!女の子だったら、名前は・・・」

「優花、でしょ？」

「うん。男の子だったら優音・・・ゆうね、とか？」

「あはは、むちゃくちゃゝ」

このときは幸せに笑ってたなゝって思います。

この後のことを考えると、少し笑えて、少し笑えませんが。

本当のことを言ってください！

朝起きると、彼が朝食を作っていた。

「おはよう！、あ、階段気をつけてね。」

ゆっくり階段を下りて、はっと思う。私は妊婦だ。

「はい、召し上がれ！」

「ごめんね。ありがと。」

私は彼と食卓につき二人で食事をとりはじめた。

「あんまり無理しないでよ。」

「優もね。」

そのときに家電話がなった。

「はいもしもし、はい。そうです。はいはい。ええ。僕もですか？はい。わかりました。では、すぐに行きます。」

「どうしたの？研究室？」

彼は椅子に座って、口を開いた。

「産婦人科の先生が、写真を見てたら気がついたことがあったから、二人できてって。食べたら行こう。」

食べ終わって、二人で片づけをしてから、電車に乗って産婦人科に行った。

話とは何だろう……。もしかして、実は妊娠してないとか？

産婦人科に行くと先生が待合室で寝ていた。

「先生……？」

私が声をかけるとムクツと起き上がった。

「んああ……。診察室で……。診察室きて。」

診察室に着いてはいると、写真が昨日のまま張ってあった。

「あの……。話って？」

先生は机の上においてあったボールペンを持って私と優に話し始めた。

「ここ、見える？これ赤ちゃんね。ここ、見える？さあ、これは

何でしょう?」

先生は真剣なまなざしで私たちを見つめていた。

「が・・・がんばらないですよ? せんせい・・・」  
優が不安そうに聞いた。

「うん。違うよ。これ赤ちゃんなんだよね。だから、双子なの。」  
それから、しばらくいろいろな話を聞いて、家路に着いた。

大学へは優が一人で行った。

先生が言うにはお腹が目立ち始めてきたら学校へ行ってもいいとのこと。

ただ、双子で、私の子宮がもともと大きく、羊水量が多いらしい。

だから、ほんのあと数ヶ月で結構な大きさになると言われた。

もしかすると、中後期あたりで単生児の妊婦の臨月ぐらいの大きさになってもおかしくないとのこと。

ああ、先が思いやられる・・・。

**本当のことを言ってください！（後書き）**

次回は4ヶ月編です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3422z/>

---

HAPPY！？LIFE

2011年12月11日20時52分発行